

豊かな生態系を育む藻場の元気復活事業（岩崎地区）（要約）

遊佐貴志

目 的

第2岩崎地区の増殖場内の礁体において、雑海藻等の着生などの原因で藻場の機能低下が見られているためホンダワラ藻場の維持・回復技術を開発する。

材料と方法

1 ヨレモク移植試験

平成27年11月に第2岩崎地区の増殖場内の礁体（円形セピア）にヨレモク種苗の移植を行った。ヨレモク種苗は、共和コンクリート株式会社の市販している種苗（以下、既成種苗）と既成種苗を北金ヶ沢多機能静穏域で8か月～2年2か月育成し、最大主枝長が12～59 cmに生長したもの（以下、育成種苗）を海藻移植用プレート（MOASIS）にそれぞれ取り付けて移植した。礁体1基に20個の種苗を取り付けるものとし、既成種苗と育成種苗をそれぞれ2基の礁体に取り付けた。

2 ウニ移植による雑海藻除去試験

平成28年3月に増殖場内の礁体（コーケンブロック）にキタムラサキウニ（以下、ウニ）124個体を移植した。ウニの移植は、ホンダワラ類の着底基質を巡る競争種となる海藻（以下、雑海藻）がウニの摂餌によって除去され、ホンダワラ類が着底可能な裸地面が形成されることを目的とした。放流礁体とそこから離れた位置に対照礁体を設定し、放流時の海藻被度をそれぞれ潜水目視によって調査した。

結 果

1 ヨレモク移植試験

計画通りヨレモク種苗の移植を行った。平成28年度に各種苗の生残、成長、成熟を追跡調査し、同時に礁体上の藻類相の変化も調査する。

2 ウニ移植による雑海藻除去試験

放流礁体と対照礁体ともに海藻被度は低く、フシスジモク、ムカデノリ、ベニスナゴ、シマダジア、ミツデソゾがわずかに観察された。さらに、対照区ではコブソゾもわずかに観察された。平成28年度に海藻被度の変化やウニの残存率を調査する。